

近世後期徳島城下近郊における『胡乱人』対策と四国遍路

町 田 哲

はじめに

本稿では、徳島城下近郊、具体的には阿波国名東郡における胡乱人対策を通して、四国遍路と、その周辺に存在する「胡乱者」として取り締まられた存在との関係について検討したい。四国遍路とは、単に四国八十八ヶ所霊場を廻り、札を納めるだけでなく、修行の一環として「乞食行」つまり家々を托鉢して廻っていた。受け入れる地域の側も、遍路を弘法大師にみたてて施しを与えることで善行を積もうとした。しかし「乞食行」は、物乞・乞食と実態的な差がない。したがって近世後期には四国遍路の多くを下層民衆が占めるようになっていったと考えられる。こうした乞食層と勧進宗教者、その背中合わせの関係に注目したい。

名東郡のうち、別宮川（現吉野川）に向かって注ぐ鮎喰川（^{あぐい}）の左岸地域（現在徳島市国府町付近）は、四国八十八ヶ所霊場の13番札所大日寺から17番井戸寺があり、いわゆる遍路道沿いで札所の集中する地域である。この地域には、早瀬村に後藤家・井戸村に湯浅家という、組頭庄屋⁽¹⁾の家があり、19世紀段階にはそれぞれ周辺5～6ヶ村を管轄していた。本稿で使用する史料は主にこの二つの家の史料である。

まず、後藤家文書の中から、倒れ遍路の二つの事例をみよう。天保8年（1837）に石見銀山領の勝蔵が四国遍路として廻り、8月晦日に延命村までやってきたが病気で亡くなった。その際に組頭庄屋が郡代手代に提出した死骸見分報告書によれば⁽²⁾、往来手形の内容にしがって、寺院の僧侶を

よび葬式をあげ、亡骸は墓所に土葬するように村役人に指示されている。また「往来手形・丸亀上り切手・御国入切手共取揃奉指上候」とあり、勝蔵は往来手形、丸亀揚切手（四国上陸証明）、御国入切手（入国証明）を持っていたことがわかる。

一方、2年後の天保10年（1839）に若狭国弥兵衛が同じく延命村の道端で行き倒れ死んでいた際の見分報告書によれば⁽³⁾、弥兵衛は札挟や杖や笠を持つ巡礼者で、また札挟に「生国若州神野村弥兵衛」と書いてあったにもかかわらず、往来手形や船揚手形・御国入切手を持っていないが為に「乞食体」とみなされ、その亡骸も「取捨」つまり葬儀なしの簡単な埋葬にとどまっていたことがわかる。

この倒れ遍路の二つの事例からは、社会的実態としては同じ四国遍路でも、往来手形の有無によって死後の扱いに差が生じている点が注目される⁽⁴⁾。こうした社会的実態における共通性と、往来手形の有無にみられる社会的な位置づけのギャップ、本稿ではこの点に着目しながら、四国遍路とその周縁について―「乞食体」と判断されたような存在がいかにして展開したのか―を考えたい。具体的には、徳島藩とりわけ名東郡における触や取締を通して四国遍路とその周縁の社会的実態を解明する。こうした視角については、既に塚田孝氏が大阪という場における乞食・勧進層の競合とその変化を「勧進の併存」として捉える方法論を提起している⁽⁵⁾。その特徴は、身分制の論理、つまり諸利害集団が公認を求め競合していく点の解明と、近年「法と社会」として触などから

社会的実態を捉える方法、両者の交差したところに特徴があると私は理解している⁽⁶⁾。

本稿では、氏の方法論を、流動的な下層民衆の実態を捉える上で有効な方法としてふまえつつ、触や取締の系統的な分析から、他国無切手胡乱者つまり往来手形のない存在と四国遍路との関係、あるいは飢饉時の領民の流浪者など、必ずしも対象が集団化しているわけではないが、乞食・勧進行為としての共通性をもつ存在に注目したい。その結果として、四国遍路を、周辺の諸存在（乞食・勧進層）や地域との関係、つまり社会の広がりの中で把握することにつながればと考える⁽⁷⁾。

I. 他国無切手胡乱者対策と社会的実態

(1) 18世紀後半の他国者対策

まず18世紀後半における他国者の取締方法を確認しておきたい。安永2年（1773）に、近年他国者が領内にみだりに入り込んでいる状況に対して、取締のあり方を家老が諮問し、町奉行⁽⁸⁾・郡奉行⁽⁹⁾がそれぞれ答申している。ここには、18世紀後半における従来の取締の基本方針が網羅的に示されている。町奉行の答申では、市中取締について、上方より来る者については、大坂蔵屋敷留守居の「居切手」がなければ市中宿泊ができないこと、また虚無僧など「門立之類」で胡乱者がいれば、町廻り同心が咎め、市中を退去させてきたこと、しかし実態としては城下外れに不筋之宿があるのか、市中に不心得者あるからか、しばしば胡乱者が徘徊しているのだ、としている。その対策として町役人が毎月改改を行い、それを提出させることで、不筋の宿の根絶を図ろうとしている。

一方、郡奉行は郷中取締について、上方からの商人・細工人などで来る者は、京都・大坂蔵屋敷留守居から「居切手」を獲得し、それをもって入国するという点では市中と同じだが、宿泊についての対応が異なる。すなわち「居切手」を郡役所に提出すれば、郡役所より旅宿「手形」を発行す

るとしている（1条め）。虚無僧についても、1条めに準拠し、京都の留守居「居切手」^{すわり}がなければ修行禁止（2条目）、さらに他国者・御国者に対し、郡奉行の「手形」を持参しない者には一夜の宿も禁止であるとの原則が示されている（3条め）。それに対し諸国からの四国修行人だけは、例外的に国元庄屋が大坂宿主の往来手形さえあれば一宿のみ許可される（4条め）。以上が基本方針である。しかし、実態としては、薬売・芸者・他国者居切手なき者が忍び入り（5条め）、また諸国からの廻国巡礼者や四国遍路が滞留している実態があり、その原因は5条め「旅宿無之候てハ逗留可仕様無御座候」つまり、宿泊させる者が居なければ逗留もできないはずだとして、宿の不取締に原因を求めている（6条め）。その対策として、6条め後半で、村役人が村内を打廻って取締り、組頭庄屋に毎月報告すること、組頭庄屋はそれを郡所に年2回報告すること、また遍路も原則一泊で、万一病気で二泊以上させる場合には村から郡役所へ届出ようとしている。

以上から、次の点を指摘できよう。第一に、許可の現状についてである。入国を保証する「留守居居切手の原則」とでも呼べる原則と、村々での一宿を許可するいわば「郡奉行手形の原則」とをセットにして、入国と宿泊者の管理統制を行っていた。これは17世紀後半以来見られるシステムである。しかし、19世紀以降、この原則に関わる触は見られなくなり、その後の展開は不明である。第二に、四国遍路はこのシステムの中では、例外的に往来手形のみで一宿が可能だったことが注目されよう。つまり四国遍路は、唯一、郡奉行手形の原則が適用されない対象であった。実はこの点が、滞留者発生の一因であり、19世紀以降、問題の焦点となっていく。

第三に、市中および郷中での多数の滞留者が既に存在している点が注目される。しかもその中に「胡乱」者がいるとの認識がこの時点で確認できる。そして第四に、藩側が滞留原因は、旅宿な

くして逗留無し、つまり「宿」にあると認識している点が注目される。したがって、ここでの取締の特徴は、(他国者許可方法を確認した上で)宿取締の強化にあったといえよう。新規に村内打廻りと毎月の改書提出が開始され、以後恒常化していく。注意すべきは他国者そのものの摘発は、わずかに市中のみ町廻り同心が摘発するだけで基本的になく、あくまで宿の取締だった点である。こうしたあり方が前提となつて、19世紀には、他国無切手胡乱者、そのものの取締へと展開していく。

(2) 他国無切手胡乱者の取締

胡乱者それ自体に対する取締の初見は、管見の限りでは寛政12年(1800)触⁽¹⁰⁾で、その実施の初見は文化3年(1806)である⁽¹¹⁾。庄屋・五人組が番非人を召連れ村内を打廻り、他国無切手者を郡境、さらに国境へと追払うというあり方である。その基準として往来手形の有無が前面にでている点が注目されよう。一方で、この段階では打廻りはさほど組織的ではなく、本格的な一斉打廻りが開始するのが、天保4年(1833)である。

天保4年11月の触⁽¹²⁾では、他国無切手者の取締が弛緩しているからか、盗賊・不正者が博奕を主宰し悪党を引き入れていること、また彼らを宿泊させ場所を提供する「ぐれ宿」が存在していること、またこうした「胡乱者」の中に盗賊がおり付火をしているとして、他国無切手者の国外への一斉追払が命じられている。また一斉打廻りの具体策を示した触⁽¹³⁾では、南北つまり阿波国諸郡で他国無切手者の追払を実施するが、新たに設定された郷目付と五人組が番非人を召連れ、村内を打廻り、盗賊体については、番非人が召捕え役所に引き下げてくること(1条め)、打廻りは、今回だけでなく普段より心がけ、無切手者がいれば追払うこと(2条め)、川原先で小屋がけする野宿者の中に不正者がいるので、番非人が詮義し、追払うこと(3条め)と、打廻りを奨励する一方で、もし胡乱者への宿貸や、ぐれ宿へ止宿の不正

者がいれば、宿貸し者は勿論、村役人も越度であるとしている(4条め)。

ここで注目されるのは第一に、阿波一国規模で一斉村内打廻りがこの年から開始され、追払・追立が翌12月上旬に実施されている点である。その主体は大きくは二つに分かれており、他国無切手胡乱者追払の主体が、郷目付(新規)・五人組+番非人で、盗賊体の召捕の主体が番非人であった。つまり基本的に村方依存の取締で、例えば召捕者送の費用なども郡中の村々百姓が負担していたのである。こうして、往来手形の有無を基準としながら、一方で18世紀後半安永年間以来の宿取締と、他方で無切手胡乱者の一斉打廻り(追払と召捕)との二本立てによる、村方依存の取締が成立したことになろう。第二にその実情である。翌5年(1834)2月11日の組頭庄屋による「申上覚」⁽¹⁴⁾によれば、12月の一斉取締直後はその成果もあったものの、しかし約2ヶ月で胡乱体之者が立戻っており、組頭庄屋が再度追立の実施を要求し、実現していく。こうした打廻りの取締方法では限界があったのである。

そこでさらに徹底した取締を、今度は郡中とくに組頭庄屋層が主体となつて、藩に提言していく動きが出てくる。

(3) 郡中による取締案—社会的実態への対応—

ア) 天保4年12月の案 天保4年(1833)12月の一斉打廻り直後の段階で、名東郡の郡中組頭庄屋が、郡代手代にあてた提言⁽¹⁵⁾には、まず現状が示されている。世間者を語る者、西国・四国巡礼に身を似せる者、他国浪人に似せ脇指を差しゆする者、修験・大社巡・廻国に身を似せる者、難船の船乗体で金比羅参詣中難渋等を述べるなど、様々な者が他国より入込み、多数徘徊し袖乞いしている実態が示されている。さらに、この秋は諸国凶作で、阿波は「まし」との噂があるからか、秋以来、無切手胡乱者が多く徘徊していることから、郡中立合の上の願いを聞き入れて、胡乱者の一斉

追払が実施されたとしている。つまり前述の一斉打廻りとは、郡中の訴願による実施の可能性が高いといえよう。また、その対策として、放火防止の打廻りを番非人と百姓が行うだけでなく、阿波国入口から日継で四国霊場を順拝すれば、無用の逗留もなくなり、胡乱者もいなくなり、正真の遍路も助かるだろうとしている。

第一に注目されるのは、対象となっているのが、いずれも物乞・ゆすりという乞食・勧進行為で共通する存在であること、またこうした者が、他国から、より作柄がましで物乞可能な阿波をはじめとする四国に相当数入り込んでいること、そして彼らの徘徊を郡中が問題視している点である。第二に、追払い・一斉打廻りだけでは効果がなく、新たな方向性が提起されている点が特筆される。それが「日継」である。「日継」とは「辺路日継帳面」と呼ばれるものを遍路に与え、そこに入国以後毎日の日付・宿を宿側が記載することで、滞在期間を確認できるようにする方法で、従来の往来手形のみでの通行許可制度を補完する取締方法と考えられよう。従来、往来手形さえあれば一宿の連続による滞留が可能であったが、そうした状態をなくす対策である。つまり、往来手形の有無という公的な位置付けだけではなく、滞留・徘徊という社会的実態で取締まる方向がここで初めて確認できるのである。しかしこの提言は、名東郡だけでなく阿波全体の対応が必要ということで、結局実現をみなかった⁽¹⁶⁾。

イ) 天保8年2月の案 しかし、さらに天保8年(1837)2月に名東郡中組頭庄屋が郡代手代に取締案を提言する⁽¹⁷⁾。この年は後述するように、凶作と物価高から大飢饉になっていく年で、ここでも他国の凶作・物価高により他国からの胡乱者流入が問題視され、数回の打廻りが実施されている。さらに名東郡として2条目以下のような取締案を提示している。すなわち、国中を配札する他国寺社については、阿波に到着次第、郡代役所へ行かせ、役所から配札許可の「板札」発行するこ

とを願っている(2条め)。「板札」を荷物につけ村々を廻在させるというこのやり方であるが、注目されるのは、勧進許可を可視化することで、不正な勧進行為そのものを取締ろうという内容である。3条めでは、まず配札する阿波の寺社と、廻在修行する山伏・虚無僧については、廻在先の村役人へ届出て、「勧進札」を借り修行させるとしている。また地回り辺路—これは阿波国内部の札所をまわる五ヶ所参りあるいは一七ヶ所参りのことかと推定しておく—も同様とする。これも勧進許可の可視化であるが、村が「勧進札」を発行する方法である。なお地回り遍路は往来手形が必要無いので、次にみる往来手形をもつ他国遍路と区別している点が注目される。

そして4条めでは、まず他国遍路について。門立する者がいれば、村の番非人のところへ案内し、番非人が「報謝札」をその遍路に渡し、遍路は荷物につけて廻在する。そして隣村に移動する際に返却すれば、無切手胡乱者の徘徊がなくなる。また札を渡す際、番非人は取調をおこない、往来手形・国入切手の有無や、札所廻りの順打ちか逆打ちかを判断し、不埒者を国外追払にすれば日継同様の取締りになるとしている。また国中の市中や山間部に住む非人で門立し物貰いする者—ここでいう非人は非人組織に属する者と想定しておく—が、日々近郷に物貰いにやって来る場合も多い。あらかじめ村々の番非人らには報謝札を渡しておくので、物乞に行く場合には、自分の非人頭から名・所を記した手形を受け取り、それを物乞先の番非人に提出し、「報謝札」を借りて廻らせる、としている。ここでは、非人・間でチェックをし、村から番非人への「報謝札」をもとに非人組織による勧進行為の管理・統制がめざされており、これが反面では非人組織の報謝権利の確保・維持にもなっている点が注目されよう。

さて以上から特筆されるのは、第一にここでは天保4年に不許可だった日継ではない方式での取締が提言されているが、基本的には天保4年と同

様、往来手形の有無では取締不十分であるとの認識がなされている。また、いずれも乞食・勧進行為という社会的実態の共通性がみられる。つまり、その行為は、他国寺社などは「配札」、山伏・虚無僧は「修行」、他国遍路は「報謝」、非人は「門立」と、言い方名目こそ異なるが、こうした乞食・勧進行為そのものを、社会的実態の面からこれを取締る方向性が出されていることになる。第二に、その上で乞食・勧進行為の担い手により、板札、勧進札、報謝札と区別されている点に特徴があり、これが郡中レベル・組頭庄屋層による乞食・勧進層に対する認識である点が興味深い。とりわけ3条めで阿波遍路は勧進札としておきながら、4条めでは他国遍路には非人同様の報謝札を番非人から貸し与えるという方式からは、他国遍路に対しては、非人内の取締いわば「制道」に近い認識であることがうかがえよう。

なお、結局この提言もすぐに認可された形跡はない。しかし、社会的実態の取締への方向は、その後の触に影響を与えていったと考えられる。

(4) 取締の展開

ではその後の取締の展開を見ていこう。まずは、打廻りの実施についてである。天保4年(1833)と翌5年冬以降、同7年(1836)2月、10(1839)年4月、弘化4年(1847)8月、嘉永3年(1850)10月、4年(1851)10月～翌5月、6年(1853)6月、7年(1854)2月、安政2年(1855)1月、3年(1856)、5年(1858)、万延元年(1860)2～3月、文久元年(1861)、2年(1862)11月、3年(1863)冬、元治2年(1865)、慶応2年(1866)2～3月・6月・12月と繰り返されている⁽¹⁸⁾。とりわけ嘉永3年(1850)以降は、ほぼ毎年のように一斉打廻りを実施しているように、打廻りが恒常化しているのである。さらに、同心円状の打廻りが開始されていく。例えば嘉永7年(1854)の場合、2月9日からは町方、11日から市中周辺の名東郡、15日からはその他の郡とい

うように打廻りが進められている⁽¹⁹⁾。これは市中から外延部に向かって一斉打廻りをすることで、他国無切手胡乱者を駆逐する方法である。こうした点は、取締の量的な拡大といえるが、実際には以下にみるような質的な変化も加わってくる。

それが、四国遍路に対する社会的実態の側面からの対応開始である。例えば嘉永4年(1852)12月の史料には、「他国表ふ罷出候者、讃州丸亀上り切手并御国入切手等持参仕候者共二而も、御国表二而三四十日成五十日百日斗も逗留仕候者」⁽²⁰⁾があり、そうした者については「津田浦へ相送、舟積仕候様被仰付」とあり、長期滞在者は国外追放となっている。注意したいのは、この場合往来手形を持っていても、御国入切手に記される阿波入国の日付をもとに、滞在に制限がかけられている点である。

さらに、安政2年(1855)1月に各郡代が組頭庄屋にあてた内容⁽²¹⁾によれば、前年11月に当該地域では南海地震と津波による被害で、領内に難渋人が多数発生し、特に南方と呼ばれる阿波国南部の被害が大きく、御救小屋を設置するに至っており、さらに「他国無切手胡乱者」が徘徊する事態になったことから、一斉打廻りを実施することが命じられている。

注目されるのは、この時、「市中・市中続村浦では、国内者が入込み袖乞・合力する者がいることから、これらについては村に戻すように」としている点で、「領内困窮人と無切手胡乱者との区別がつかない状態」が領内で展開している点である。領内困窮人も無切手胡乱者も、いずれも往来手形がなく徘徊し袖乞している点では社会的実態は共通しており、ともに打廻りの対象となっているのである。

さらに興味深いのは、「往来手形・入切手等所持慥成辺路修行之儀、日数際限相立不申二付、此度之義は御国内へ入込日数十五日ヲ立候者ハ御境目二而追払可申」とあり、入国後15日たてば国境に追払うことが明言されている点である。往来手

形所持の遍路に対する制限がより徹底していることになる。

さらにこれとは別に1月13日の再触では「市中并御山下村浦之義八、辺路報謝札相渡不申様可仕事、但諸郡之義、報謝札郡切二而他郡へは相及ばせ不申様取究可申事」⁽²²⁾、つまり市中その周辺村以外では、郡単位で、「辺路報謝札」が既に実現しており、それを藩が公認していることがわかる。

以上の点から、第一に天保4・8年に郡中側が提案した、社会的実態―滞在期間や勧進行為そのもの―への取締が、藩の触で公認されていること、第二に、他国無切手胡乱者だけでなく、往来手形をもつ遍路に対しても取締が拡大し、遍路自体が怪しまれている点が特筆されよう。そして最終的には、文久3年(1863)冬の触で他国四国遍路の一宿禁止、つまり実質的な入国禁止が出されていくことになる⁽²³⁾。

以上、主に19世紀の無切手胡乱者の取締をめぐり検討してきたが、ここで小括したい。まず、様々な宗教者や乞食・勧進層が徘徊しており、そこに盗賊・火付等の「胡乱者」を想定し、取締が展開していた。その取締とは、一つには入国の側面と、二つには宿の側面で展開していたが、特に19世紀以降は往来手形の有無によって判断され、手形を持てば公認されていたこと、しかし、無切手者の打廻り(追払・召捕)強化と共に、滞在期間・勧進行為という社会的実態の取締へと質的な変化を遂げていったことがわかった。その背景には、こうした乞食・勧進層の流入増加と、それを忌避する郡中側の動きがあったのである。したがって、その対象も、他国無切手者だけでなく、乞食・勧進層全般に拡大していき、往来手形をもつ四国遍路にも及んだのではなかろうか。

ところで、19世紀中頃以降は、前述安政2年の南海地震の事例にもあったように、飢饉・天災等により領内人別之者が一もちろん往来手形をもたない無切手の状態で一袖乞いに出る場合が多発し、こうした領内人別の者も打廻りの対象にかかって

くることになる。では「他国無切手胡乱者」と「御国人別之者」の取締とはどのような関係にあったのだろうか、章を改めて検討しよう。

Ⅱ. 御救小屋―「他国無切手胡乱者」と「御国人別之者」―

(1) 天保8年の飢饉と御救小屋

徳島藩での御救小屋の設置は、天保8年(1837)の大飢饉の時、安政2年(1855)の南海地震と津波の時、文久元年(1861)に確認することができる。ここでは、天保8年の飢饉と御救小屋について検討したい。

ア) 飢饉の進行 近くの高川原村の藍作地主層の記した「かどや日記」⁽²⁴⁾から、この年前後の物価変動をみると、天保4・5年(1833・34)段階でも「天明年中凶年以来之高直」とあるが、とりわけ同7年(1836)の盆前よりかなり物価が上昇し、翌8年(1837)3～6月がピークとなり、米は天保2～3年の約2倍・麦粟稗は3～4倍にも達している。まさに「土地始まりて以来之高直」だったことが看取できる。

この時の飢饉状況をさらに「かどや日記」で確認しよう。天保7年12月に市中の円徳寺で奇特人から米を集め、飢人へ施粥があり、翌2月中旬には村々で「一揆ヶ間敷義」が勃発して施米に至っている。また、こうした中、前述のように郡中による勧進札が提案されている。このほか、2月大塩平八郎の乱、前年秋甲州一揆、2月小倉大火事といった他国の不穏な情報もリアルタイムに入っている。3月には種芋の盗みが多発し、春は長雨が続き、傷寒(腸チフス)も流行している。こうした状況にとどめをさしたのが、徳島藩独特の春年貢一麦代銀納一の上納銀が高値の麦相場値段のまま取り立てられことになった点であろう。なお「かどや日記」にはみえないが、3～6月には倒れ遍路や身元不明の行倒死者・捨子が激増している⁽²⁵⁾。

以上から、天保7～8年の当該地域における飢饉状況の特徴としては、第一に物価高騰・長雨・疫病に加えて年貢減免なしにより飢饉がエスカレートしている点、第二に「貧家餓死者」が多数出現し、他国自国からの徘徊者が増加し、とくに市中およびその周辺に流入している点にみることができる。第三に、物価ピーク時に遅れてようやく8月下旬に御救小屋が設置されるが、それまで藩による飢饉対策がみられない点が注目されよう。

イ) 御救小屋の状況 こうした中、設置されている御救小屋の状況とは、どのようなものだったのだろうか。まず天保8年8月21日に、名東郡代手代が組頭庄屋らに郡代所への出頭を命じ⁽²⁶⁾、23日には、組頭庄屋に対して「袖乞之者御救」のため、南新居村に小屋懸が命じられている⁽²⁷⁾。これをうけて、翌24日に組頭庄屋が御救小屋見取り図を作成した⁽²⁸⁾。その図によれば、名東郡南新居村と高崎村にかけての鮎喰川の河原に、長屋状の小屋が当初5ヶ所ほど作られようとしている。御救小屋終了後、組頭庄屋らが後年のために記した「覚書」によれば、実際には、御救小屋は2間×45間といった長屋状の小屋が、合計7棟が急ごしらえて作られ、その他に御用所や、請払役所、釜家粥焚所、米搗小屋、番非人詰所小屋、雪隠などが設置されたのである⁽²⁹⁾。

また同じ「覚書」によれば、当初米200石・稗200石をつぎ込み、1人あたり朝夕米1日2合の粥などを与えることになり、早くも8月28日には施粥が開始され、10月末まで続いている。しかしその実態は、人別粥の請物（容器）すら持たない者が多く、とりあえず1,000人分茶碗を用意したものの、小屋入り人数の増加でなお不足していた状態であった。その後、さらに人数が増え、小屋の間口を2間づつ仕切り、1ヶ所（2間×2間）に20人を詰め込み、20食分の手桶を1つ置き施粥し、それも各部屋の「頭立候者」に配布させるやり方であったことがわかる。

以上の御救小屋の展開からは、第一に基本的

に御救小屋設置の費用や物資はたしかに藩が負担していたが、その実施にあたっては名東郡の組頭庄屋が中心となって差配していた。にもかかわらずここでは、「御仁恵を以て、御国民始め他国表通り懸り之者共御救被為仰付候」という藩による「仁政」が全面的にアピールされていたことが注目されよう。第二に、御救小屋には、藩が想定した以上の人数4,000人が集まってきた点が特筆される。藩の見積もりでは米200石で1人1日2合、つまりのべ10万人分を確保していたのだが、現実には1日4,000人ということになると25日分にしかない。また各部屋2間×2間に20人の記述をもとに計算すれば、小屋全体の収容限界は約2,000人であるが、現実にはその倍の人数が入ってきたことになる。つまり御救小屋といっても、相当劣悪な状況で、食料不足であったこと、さらに各部屋には「頭立候者」がおり、そうした者に依存したあり方は、こうした困難な状況にさらに拍車をかけるものであったと推定できよう。これが藩による「仁政」の内実だったのである。

ウ) 御救小屋の性格 御救小屋終了後に組頭庄屋らが記した史料によれば、8月28日から前半1ヶ月間の御救小屋収容者の実人数は4,093人であるが、その内訳は全体でA B C Dの四つに分類できる⁽³⁰⁾。Aは病死者で、144人もこの間に亡くなっている。「御国者」つまり領民が大半であるが、一方で他国者も含まれている点が注目されよう。次のB「帰村致候者」は、手続を経て帰村した人数で、全体の四分の一を占める。またC「御小屋入以来抜帰候分」は、手続を経ずして出て行った者で、身元や行き先が不明で、これも約700人と相当な数にのぼる。D「九月二十三日より諸郡組頭庄屋組切取調帳面を以引渡候分」は、御救小屋から諸郡の組頭庄屋に引渡すことで、事実上の強制退去を意味するが、収容者の半分以上を占めている。つまり9月23日に強制退去が始まったのだが、実際には御救小屋に相当程度の人数が10月末まで残留していたものと考えられよう。

その上で気づくのは、B・Dで、市中・名東郡・板野郡などの近辺だけでなく、南方つまり那賀郡・海部郡からも多くの困窮者が流入している点、また穢多の割合がとくにDで大きい点である。もう一点注目されるのが、Bに「往来手形所持四国辺路、先々修行仕せ候分」が55人、「他国無切手者者、船送り又は境目追払候分」として188人も書き上げられている点である。遠方の領民や、遍路および他国者無切手者も困窮者として相当数が流入してきており、社会の底辺層として共通する実態であったといえよう。また四国遍路および他国無切手者に対する藩・および郡中の対応に注目すれば、往来切手を持っていれば遍路を継続できるものの、無ければ舟送・国境追放ということ、つまり一斉打廻りの場合と同様の処置がなされている点が特筆されよう。さらにCの抜帛にも、こうした遍路・他国無切手者は相当数含まれていたのではなかろうか。

以上から、第一に実態として、飢饉により徳島藩領の飢民が市中・名東郡近辺に相当数流入していること、また他国からの飢民も流入し、遍路も困窮していたこと、第二に領内の飢民も、他国無切手者も、いずれも往来手形はなく、袖乞・物乞する点で社会的実態は共通していた点、第三にこうした存在を御救小屋に収容後、峻別し、他国無切手者は国外追放という打廻り時と同様の対応がなされていた点を確認することができた。こうした対応については、早くも御救小屋設置直後9月1日の時点で藩側が組頭庄屋に宣言している⁽³¹⁾。

すなわち、御救小屋とは、もちろん領内の困窮者を救恤することがその目的であったが、単なる困窮者救恤のための施設としてだけではなく、袖乞の領民と他国無切手および遍路とを区別し、それぞれを還住、追放する手段として設置・機能していたといえよう⁽³²⁾。

(2) 文久元年(1861)の御救小屋

こうした動向は、さらに打廻りの側面にも影響

を与えた。文久元年(1861)の場合、9月末に「御山下諸所」に徘徊する無宿胡乱者の狩立、つまり一斉打廻りの実施命令が出て、10月6日に開始されていく。そこでは、村「人別之者」が「袖乞」をしている場合、その袖乞者の出身の村役人を召喚し、本人を引き渡すよう命じている⁽³³⁾。つまり、領民の袖乞も狩立ての対象となったことが確認できるのである。さらに、10月5日には、「御山下表他国無切手並袖乞之者共、当春之通六日〆狩立御始取極、御小屋入に被仰付、粥取下御行着之上追払、又は村人別之者共は其村方へ御引渡可被仰付候」と他国無切手・袖乞之者を狩立て、「御小屋入」をし、粥を与えた上で取り調べ、最終的には追払あるいは村方人別の者は村方に引渡すことを、それも実施前から命じられている⁽³⁴⁾。

また藩から小屋入人数見積もりを出すよう命じられた組頭庄屋が、「当春始十日分惣人数八百七拾人余御座候に付、平し百八拾七人程に相成候得共、春と違此節に而は四国遍路体之無切手者大に少く可有御座、並に村人別之者共迎も、此砌一円麦蒔にも取懸り追々農繁に罷成り候に付、稼向相調候者共は日夜稼等にも存付、袖乞指行候者も可有御座方に付、春は必少く可有御座哉」と答申している⁽³⁵⁾。春に実施した御救小屋では最初の10日で870人(1日平均87人)であったのに対し、秋の現段階では、春とは違い「四国遍路体之無切手者」が少なく、村人別之者も麦蒔季節(農繁期)であることから、春の7割程度10日で600人程と見積もっている。

以上の点から、第一に春は四国遍路が多く、その中に「四国遍路体之無切手者」が多数混在していたこと、つまり遍路と他国無切手者の通底性を見て取ることが出来よう。第二に御救小屋入は狩立者の一時的収容を意味しており、他国者追払や、人別者の還住が基本となっていることがわかる。その点では、天保8年(1837)の御救小屋の場合と共通しており、異なるのはその直前より「狩立」が前提として行われていた点である。すなわちそ

の性格は、取締の一環としての御救小屋に、より傾斜していったのではなからうか。

おわりに

以上、他国無切手・胡乱者の取締を軸に、その展開をみてきた。その基本には、往来手形の有無があったが、特にⅠでは社会的実態の共通する存在へと取締りが拡大していったこと、Ⅱでは共に無切手として区別しにくい他国者と御国人別之者とを御救小屋を介して選別し徘徊を根絶していく方向、この二つの流れが展開してきたことが理解できたと考える。その取締は、領民の袖乞など一時的な場合もふくめて「乞食・勧進層」としての社会的実態をもつすべての存在へと拡大していく方向であったといえることができるのではなからうか。

また、そうした方向性は、最終的には藩が触によって示してきたものであるが、その動因となったのは、施しを求められる村々百姓、とりわけ郡中の組頭庄屋層の提言であった。そこで最後に、彼ら組頭庄屋層とほぼ共通する藍作豪農層の意識をとりあげたい。

前掲「かどや日記」には、天保8年(1837)の御救小屋に対する藍作豪農層の意識がよく示されている⁽³⁶⁾。前半では、村々での噂として、前年冬以降大凶年で餓死者の多い時分に「御救」がなく、すぐに極餓が出現したこと、これに対し藩側は、公儀向や諸国への聞こえが悪いので、外聞のために実施したのだ、と藩による対応の遅れ、仕方なしの対応への不満を批判的に述べている。後半では、百姓に対して、藩は高い年貢を賦課し、厳しく取り立て、百姓側もそれに応えて田地を売却してまで年貢上納した。にもかかわらず、「犬猫同前之乞食類」に対して「御救」が実施され、「大不評判」であったとしている。ここには、百姓に対する無策と、乞食層への「御救」、この差への不満がシビアに描かれている。つまり彼らに

は、藩の対応への不満、とりわけ社会的矛盾—飢饉が人災でもある点へ批判の視点が芽生えている一方で、乞食層に対しては一意識を共有しない—露骨な蔑みとを内包した、屈折した意識があったといえるのではなからうか。その意識は、「胡乱者」に対して、施す側の立場から徹底した実態の取締を求める意識と同一線上にあったと考えざるをえないのである。

註

- (1) 組頭庄屋は、他藩の大庄屋制と共通する側面をもち、郡内のいくつかの村を組み合わせた組村を統轄する存在で、郡中諸割賦・組村割賦を運営するだけでなく、藩からの触・達の伝達、組村からの訴訟・歎願、公事出入の調停・処理、組村の風俗取締・治安維持、農作状況・家数の調査報告などを主要な任務としていた。詳しくは、高橋啓「近世後期阿波における『諸割賦』をめぐる」(初出有元正雄編『近世瀬戸内農村の研究』溪水社、1990年。のち高橋啓『近世藩領社会の展開』溪水社、2000年に「近世後期の村落と『諸割賦』」と改題の上所収)を参照のこと。
- (2) 天保8年(1837)9月1日「申上覚」鳴門教育大学所蔵後藤家文書5-55②(井馬学・町田哲「後藤家文書廻路関係史料」『四国廻路の研究Ⅱ』鳴門教育大学、2005年および「後藤家文書画像データベース」<http://www.naruto-u.ac.jp/db/gotou/>参照)、以下「後藤5-55②」と略す。
- (3) 天保10年(1839)11月26日「申上覚」後藤5-106-4②。
- (4) 井馬学「徳島藩の廻路対策と村落の対応」(『四国廻路の研究Ⅱ』鳴門教育大学、2005年)および拙稿「近世後期阿波の倒れ廻路と村」(『徳島自治』88、2006年12月)。
- (5) 塚田孝「身分的周縁論—勧進の併存を手がかりとして」(『日本史講座6近世社会論』東京大学出版会、2005年)および塚田孝『近世大坂の非人と身分的周縁』(部落問題研究所、2007年)。
- (6) 塚田孝『近世身分制と周縁社会』(東京大学出版会、1997年)。「法と社会」については、同『近世大坂の都市社会』(吉川弘文館、2007年)および同編『近世大坂の法と社会』(清文堂、2007年)。
- (7) 前田卓『巡礼の社会学』(ミネルヴァ書房、1971年)、三好昭一郎「四国廻路研究序説—廻路の民衆化と諸藩の廻路政策」(『史窓』〈徳島地方史研究会〉10、1980年2月)など、従来の四国廻路の研究では、

ともすれば対象を四国遍路に限定し、かつ四国遍路全般の成立・展開を主題としたり、藩の遍路対策を検討するにしても遍路を対象とした触のみを対象とし、それも取締りの藩毎の強弱の指摘に留まっていた。今後は地域との関わりあるいは社会の広がりの中で四国遍路を捉えていくことが求められよう。近年の井馬学（前掲註4）論文や浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究—四国遍路の接待文化—』（古今書院、2008年）などの成果も注目されるが、本文で指摘した点を歴史的にかつ自覚的に進めていくことが必要であろう。

- (8) 藩法研究会編『藩法集』（創文社、1963年）2001、730～731頁。
- (9) 藩法研究会編『藩法集』（創文社、1963年）2002、731～732頁。
- (10) 申3月4日（湯浅栄五郎より組村庄屋あて廻状）『徳島県部落史関係史料集（第二集）』（徳島県教育委員会、1977年）90、17頁、湯浅家文書。
- (11) 文化3年（1806）7月（花園村・敷地村・日開村各村役人より湯浅栄五郎あて書付）『徳島県部落史関係史料集（第二集）』90、17～19頁、湯浅家文書。
- (12) 天保4年「御用組村御触状」『徳島県部落史関係史料集（第二集）』90、14～15頁、湯浅家文書。
- (13) 天保4年「御用組村御触状」『徳島県部落史関係史料集（第二集）』90、15～16頁、湯浅家文書。
- (14) 天保5年（1834）2月11日「申上覚」後藤5-351②。
- (15) 天保4年（1833）12月「申上覚」後藤5-351④。
- (16) 天保4年（1833）12月21日（組頭庄屋阿部源左衛門より後藤善助への書状）後藤5-351。
- (17) 天保8年（1837）2月「申上覚」『徳島県部落史関係史料集（第二集）』（徳島県教育委員会、1977年）87、9～11頁、湯浅家文書。
- (18) 後藤5-214、同15-8-1、同18-28、同18-275、同19-40、同20-59、同20-488、同22-7、同22-7、および「御触控」（徳島県立文書館所蔵『武田家文書』111・112）。
- (19) 嘉永7年（1854）2月（郡代触）後藤22-7-54。
- (20) 嘉永4年（1851）12月2日「御郡代御直二以後被仰付御書付之写」後藤22-7-43。
- (21) 安政2年（1855）1月「覚」後藤22-7-62。
- (22) 安政2年（1855）1月13日（郡代手代配状）後藤22-7-64。
- (23) 徳島県立文書館所蔵『武田家文書』112（元治2年・1865）。および1869年12月1日「御糺二付申上覚」後藤5-221①など。
- (24) 元木字三郎筆「かどや日記」（福井好行『阿波の歴史地理（二）』1968年）天保4～8年部分。
- (25) 前掲註4井馬論文によれば、この年、組頭庄屋

後藤家の管轄地域における病死遍路は、ふだんの年の2～3倍にあたる17人にのぼるといふ。身元不明の行倒死者および捨子の事例は、「御触控」（徳島県立文書館所蔵『武田家文書』111）に頻出する。

- (26) 8月21日（郡代手代配状）後藤2-28①。
- (27) 8月23日「御配御状写」後藤2-28②。
- (28) 8月24日「南新居村御救小家一件御状添」後藤2-28③。
- (29) 天保8年（1837）11月「覚」『阿波藩民政資料』（徳島県物産陳列場、1914年）395～399頁、窮民御救助覚書・後藤家文書。
- (30) 天保8年（1837）11月（表題なし）『阿波藩民政資料』（徳島県物産陳列場、1914年）399～403頁、御救木屋入人数御引払内分帳・後藤家文書。
- (31) 天保8年（1837）年9月1日「南北組頭庄屋共方へ申聞趣意書覚」『徳島県部落史関係史料集（第二集）』（徳島県教育委員会、1977年）82、1～2頁、湯浅家文書。
- (32) 塚田孝『近世日本身分制の研究』（兵庫部落問題研究所、1987年）、菊池勇夫『飢饉の社会史』（校倉書房、1994年）菊池勇夫『飢饉から読む近世社会』（校倉書房、2003年）。
- (33) 文久元年（1861）9月29日（表題なし）『阿波藩民政資料』（徳島県物産陳列場、1914年）335～336頁、無宿胡乱者取締方御触書写・湯浅家文書。
- (34) 同年10月5日（表題なし）『阿波藩民政資料』（同前）335～337頁、胡乱者并袖乞之者狩立御触写・湯浅家文書。
- (35) 同前（表題なし）『阿波藩民政資料』（同前）335～337頁、胡乱者狩立付御小屋入人数見積書・湯浅家文書。
- (36) 元木字三郎筆「かどや日記」天保8年部分（福井好行『阿波の歴史地理（二）』1968年所収）、266頁。

付記 本稿は、2009年7月4日にお茶の水女子大学でおこなわれた第11回「国際日本学シンポジウム」での報告を原稿化したものである。当日の報告では史料・図・表を提示したが、原稿化に際して一切を省略した。詳論は別の機会に譲りたい。